

岡野工業株式会社代表社員

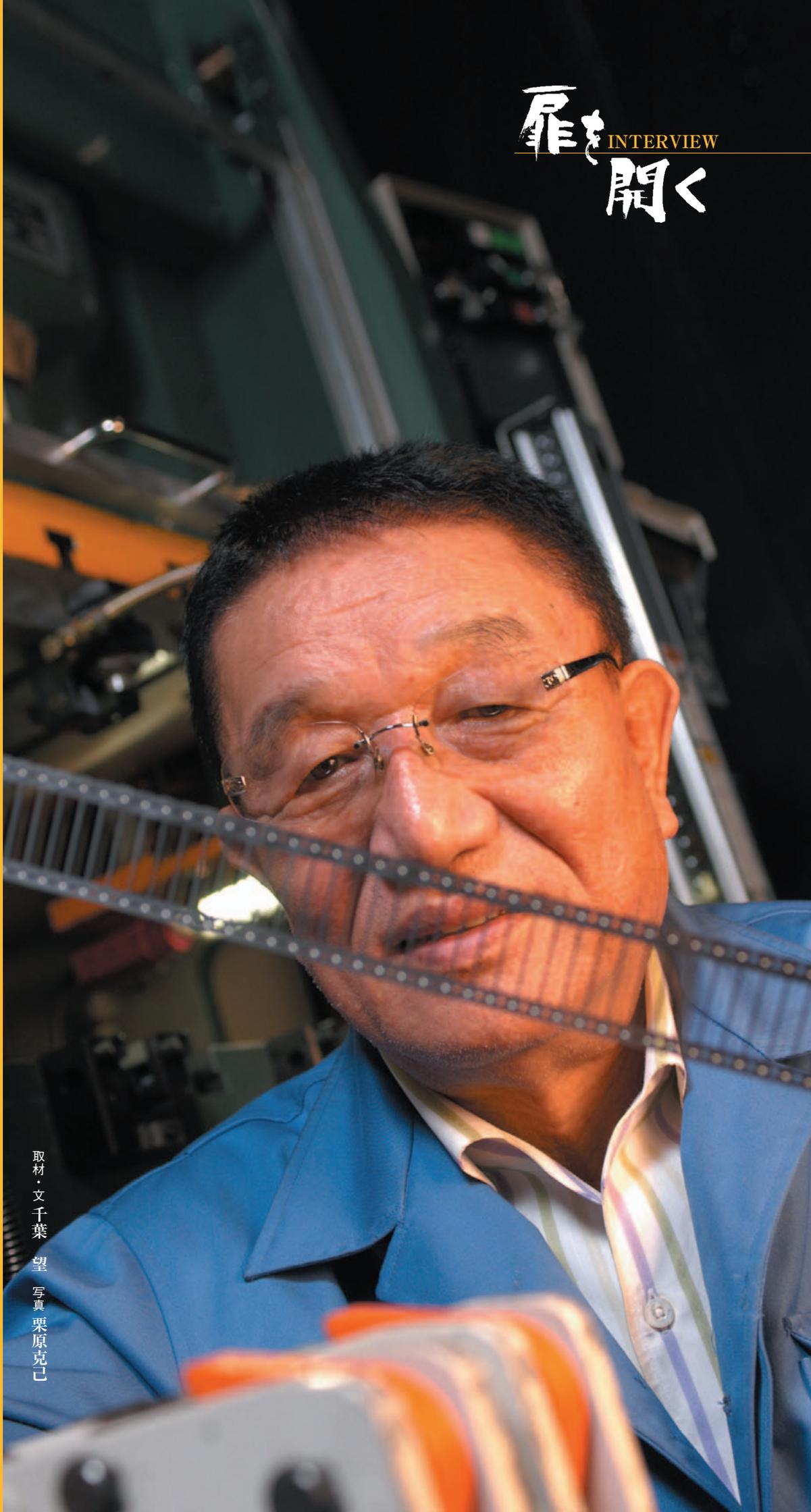
岡野雅行

Masayuki Okano

子供の時から、人と違うことがやりたかった。そんな個性を日本社会の中で損なうことなく、ものづくりの世界で開花させた岡野雅行氏。

従業員数六名ながら、人がやりたがらない難しい仕事を実現していく力を認められて、「世界一の町工場」の異名を取るまでになった。個性重視のはずが、どこか子供を型にはめたり、大人たちを息苦しくさせがちな現代にあって、豪快でさわやかな風を運んでくる岡野氏。落語家の噺^{はなし}を思わせる活きのよい岡野氏の話しぶりを、どうぞお楽しみください。

取材・文千葉 望 写真 栗原克己



「人がやららないからこそ燃える」

「玉ノ井」が俺の学校だった

——「世界一の町工場」の異名を取る岡野工業さんにお邪魔しました。本当下町らしい場所にあるんですね。

岡野 そうよ。戦争が終わったとき、俺は一一歳だったかな。そこら中が焼け野原で、ここから浅草の松屋が見えちゃうんだもの。富士山だつて見えた。ここらへんも昭和二十年三月十日の東京大空襲で焼かれてね。俺んちは疎開しなかったから、もろに当たっちゃった。さんざん空襲に遭つて、もう怖いという感覚なんて麻痺しちゃつてるから、燃え盛る炎を見て「奇麗だなあ」つて見上げてたよ。

戦後はここらにも進駐軍がきたんだよ。なぜかって、ほら、ここからすぐのところ玉ノ井があるだろう？ あそこは赤線があったからさ。もともとここらは戦前、今でいうなら六本木、歌舞伎町みたいなもの、不夜城だったの。ち

よつと向こうの通りは一大遊郭だからね。永井荷風なんか読んでもらえると分かるんだけどね。その隣は向島の花柳界、芸者がたくさんいて、これまたすごいわけだよ。

俺はそういうところで育ったわけ。で、通った小学校が更正小学校。ひどい名前だろ。何も悪いことしてないのに、なんで更正しろなんて言われなきゃいけない。そんな名前の学校があるか(笑)。孫がかわいそうで、名前を変えろつて、随分俺も文句を言ったよ。三年くらい前にやつと名前が変わったけどね。実はそばに更正橋という橋があつて、遊郭地帯の女の子たちに「悪いことしてないで、早く更正しなさい」つてな教えを垂れてたんじゃなくかと思つたわけだ。

ま、俺も早くから玉ノ井界隈には出入りしてたんだよ。そもそも学校なんて大嫌いだつたからね。

すぐにそっちに遊びに行っちゃう。その客に混じつて俺たちが

キ大将も将棋を教わつたり碁を教わつたりしながら遊んだわけだな。ぶん殴られながらもお使いしたり。お姐さんたちのお使いもよくやつたよ、せつけん買つてこのなんだのつて、金を預けられるんだけど、お釣りはそのままもらえるんだ。だから俺、物心ついてから親に小遣いもらつたことない。いつもお金は満タンだよ。

世渡り学はそこで習っちゃつたわけだよ、若いというか、餓鬼の

「金型屋」からの脱却が転機になった

——お父様が金型工場を経営なさつていたんでしたね。

岡野 そう。オヤジは真面目な男でね。遊びに誘われても断つちゃうような男だった。だんだんつきあい狭くなる。でも、腕は良いから仕事は来るんだが、こんなこつちやダメだと思つた。どうも

うちに。なるほど、お得意さんと

の付き合いはこうやってやんなきゃいけないんだなつてことが身に染みて分かつたよ。そうやって毎晩うちへ帰つてくるのは二時、三時。

——それじゃあ楽しくつて、学校には行けませんね。大人つてもも見えるだろうし。

岡野 そういうこと。だから今の子はいわいそうだよな。うちへ帰ると、みんなゲームばかりだろ。これじゃ人間、バカになっちゃうよ。

自分の父親が真面目だと、せがれは柔らかなのができるね。親父が柔らかいとせがれはまじめなのができる。これ、ほんただよ。

とにかく俺は悪かつたから、親に「早く籍抜いて出て行つてくれ」つて言われてたんだから(笑)。おふくろにも言われたもん。「お



2点とも、墨田区にある岡野工業。一見、どこにでもありそうな町工場の建物だが、中ではテルモの注射針など、よそでは作れない製品の数々が生み出されている。

まえ、何やってもいいから、人殺しとかっぱらいだけはほしないでくれ」って。そんな感じですよ。うちの女房に聞けばよく分かる。

ま、俺は昔っからどっか変わったところがあつたんだろ。な。だけど、人がやらないことをやんなかったら、俺なんて世の中のドロップアウトの人間になっちゃう。

学歴はないし、地位や人脈は何もないんだから、普通のことをやってたってどうにもならない。親父みたいに真面目にやるだけでもダメ。ぶん殴られつつ親父に金型づくりを教わりながらそこを考えるとところから、俺の仕事人生は始まったようなもんだ。

——岡野代表は金型だけにとどまらず、その先のプレスにまで進んでいかれたんですね。

岡野 そう。うちで金型を作つて、ライターとか口紅ケースなんかをどんどんこさえてたんだけど、うちの金型を使って仕事をしているプレス屋さんのほうがずっともうけてるってことに気がついたんだ。いい金型を作つてやっつてるのはうちなのに、どうもあいつらのほうがもうけてるのはおもし

ろくねえ(笑)。

なんでかというのと、俺がいいものを作るでしょう。そうするとプレス屋のおやじがぶぐやてんぶらをご馳走してくれるわけ。「なんだこいつらは、もうかつてんだな」って思っていたわけよ。こつちが二輪車に乗っているときにあつちは四輪車。

だから俺は自分でもプレスをやりたいと思つた。そうすれば直接大メーカーとだつて仕事ができるかもしれない。だけど親父がやらしてくれないんだ。干されちゃうからね。俺はその頃そんな仕組みが分からなくて、どうにもしようがなくて、親父に頼んで工場の仕事が終わつた後に、場所を借りて自分で半端仕事をもらつてきてはやつてたんだ。

——それをお父様は許してくださいですか。

岡野 いや、大反対。だけどおふくろがとりなしてくれてね。「どうせあいつは三日で飽きる」だつて(笑)。何しろ俺は幼稚園も三日で中退し

た前科があるからさ。当時はここらで幼稚園に通う子供なんて少なかったんだよ。そ、お坊ちゃまつてわけさ。それなのに幼稚園が耐えられなくて、三日でパー。

だけどこのときは飽きなかった。毎晩三時まで働くことを一〇年間続けたもんだから、目の下がクマで真つ黒になつたんだよ。そんな俺を見て、ある会社の支店長が日立電線に紹介状を書いてくれたの。

それを持って土浦にある工場の工場長に会いに行った。ちようど日立電線も銅を加工して納めるだけじゃなく、付加価値を付けて製品化したいと思つてるところだつたんだね。俺と考えることは一緒だよ。俺もプレス屋には恨みがあるからさ。「いいことだ、どんなやろう」ってことになつたん

だ。で、おかげさまで図面を頂いて、最初にやつたのが自動車のラジエーターに今でも入つているサーモスタット(温度センサー)の冷間鍛造。うまく行つて、喜ばれて、どんどん仕事が増えていったんだ。

こういう仕事をしてみると、実によく時代が見えてきた。このままで行つたらプレス屋だつて今までのようにはいなくなるぞ、と。メーカーで製品にしちゃうんだから。農家の人が小豆をこさえたら、そのまんま羊糞までこさえちゃうようなもんだ。それも虎屋よりうまい羊糞だ。そういう時代なんだよ。これはもう大変な時代が来るぞ、俺の時代だぞ、と思つたね。おかげでもうけさせていたたいて、車もいいのが買えるようになった。



上／一枚の金属板からプレスで作られるご自慢の鈴。「どうやってこしらえたか、当てたら偉い」のだそう。中／これが注目の注射針。中央の階段状のうち、細いほうが針となる。下／岡野代表が勉強のため購入したドイツの本。図を参考にする。

台湾で家庭人として「更正」して帰国

—— だけど、そこにとどまらなかつたわけでしょう？

岡野 そうだよ。何しろ一九六七年から一九八五年まではこの業界のどこでも景気が良かったから、みんな贅沢になっちゃって安い仕事なんてやらないんだ。これじゃあダメだと思つたのがミツミ電機。台湾に工場を出そうと考えたんだ。そしたら「岡野さん、誰もやってくれないからこの仕事をやってくれないか」って言われてね。「みんなが安くてやらないもの、俺だつてやりたかねえ」って断つたんだけど、俺もひらめいたんだな。それなら完全自動機にすればいい。それを自分で作ればいい。数年後、台湾に進出するときは自動機を買ってもらえば俺ももうかるから、

そういう契約にも行つたんだよ。

それで台湾にも行つたんだよ。その当時の台湾といえば、日本の男にとつてはまあ天国みたいなところだな。「岡野さんなんか行つたらもう日本に帰つてこないよ」なんて、女房に吹き込むヤツがいたぐらい。ところが違つたんだな。そりゃ、遊んでいたヤツもいたよ。真面目だった人間ほど狂つちやつたりしてな。ところがこっちは玉ノ井で鍛えてる。台湾の人たちが奥さん連れてホテルのディナーショーに来ていたり、庶民だつて家族一緒に屋台で食事を楽しんでいたりするのを見て、かえつて考えさせられちゃつたんだ。俺、女房をホテルのディナーショーに連れてつたことなんかあるだろうか、

つて。帰国してすぐに女房をディナーショーに連れて行つたんだよ。思いがけず、俺も「更正」し

人がやらないことにこそ燃える

ちゃつた(笑)。女房は「お父さん、一体どうしたの」って気味悪がついていけど。

—— 人のやらないことをやって、

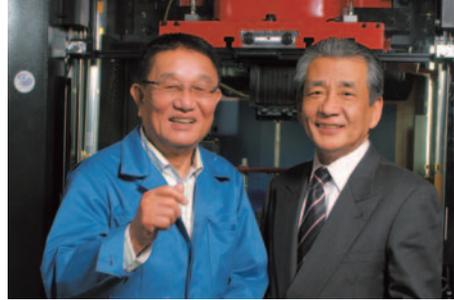
とうとうテルモの注射針という大ヒットを生み出されました。岡野 細くて痛くない注射針ね。これはもともと、糖尿病でしょっちゅう自分でインスリンを打つ人のためにこさえたんだ。毎日注射をしてると皮膚が硬くなつて針が入らなくなる。痛いのだつてつらいだろ。それをなんとかしたいと話を持つてこられたのが始まりさ。うちの針は元のところが大きくて、先がうんと細くなつてるだろう。こういう針は世界中どこにもないんだよ。設計したのはテルモ

の若い社員だったけどね。金型屋さん、プレス屋さん、パイプ屋さんを一〇〇軒以上回つたけど、断られて悩んだ。うちの評判は聞いていたらいいんだよ、だけど来る勇気がなかったの。なんでかというところ、「岡野というのは野蛮人だ、おまえなんて一人でお願ひしますなんて行つたら、玄関でぶん殴られて帰つてくることになる」と言われてたんだな(笑)。ひでえだろ。

—— けどまあ、来たわけだ。で、図面見た途端に「これはできないことないよ、できるよ」と言つたもんだから、やつこさん、びっくりしてね。これまで世界ナンバーワンといわれていたアメリカのメーカーが、今リコールで大変なの。全体が細い針だと詰まっちゃって液が出ないんだつて。だけどうちで作つた針は元が太くて先が細いだろう。これは流体力学とやらで

おかの・まさゆき ●昭和8年、東京墨田区生まれ。向島更正国民学校卒。実家の金型工場を手伝うかたわら、30代になると量産のためのプラントを開発して売るようになる。1972年に父親から家業を継ぎ、岡野工業株式会社を設立。代表社員を名乗る。2004年、旭日双光章を受章。テルモから依頼されたインスリン用注射針「ナノパス33」で2005年度グッドデザイン大賞を受賞。著書に『俺が、つくる!』『あしたの発想学』など。





工場内で談笑する岡野代表とインタビューの日本銀行情報サービス局長・湯本崇雄。

言えば、少しの圧力でもスムーズに液が流れるんだって。それを俺は従来とは違う板を丸めて作る方法で加工したんだ。

そのときヤツがこんな話をしてくれた。テルモは今、日本でナンバーワンだ。だけど、この針を開発できたらナンバーワンになれるって。ほら、俺も日本人で判官びいきだからさ、力が入っちゃうわけだ。そしたら株価も上がったよ。開発前一六〇〇円だったのが、今じゃ四八〇〇円。その男には「俺が役員にしてやる」って言うてるんだ(笑)。

だけど、この針は以前のものよりも比べると高価で病院の利幅が薄い。患者さんは医者の方箋がないと針は買えないのに、処方箋に書いてくれないんだよ。ひでえ話だろ。こっちの針ならずつと楽なのに……。結局人の痛みなんて、一〇〇年だって我慢できるってことだな。

俺は企業を普通の人とは別の角度から見ているだろう？ だからいろんなことが見えるんだよ。あの有名なメーカーの仕事を長くやってきたのに、断ってしまったこ

とがあった。それはなんでかという、前は良かったのに、そのころになると図面を持ってきて「幾らでやれるか？」ってことしか言わなくなったからだ。そういう会社の仕事は、俺はやりたかねえ。もう絶対その仕事はやらねえと断っちゃった。それから一〇年ぐらいしてからかな。「あの会社は三年後には赤字になるからな」って予言したの。みんな信じなかつたけど、俺の言葉は当たったんだよ。だつてろくな経営をしてなかつたからな。

——組織が硬くなってしまうん

——小さな頃からの教育も大切でしょうね。岡野代表は修学旅行生を見学に受け入れているとかがありました。

岡野 申し込みはたくさんあるけど俺も忙しいから年間一〇校、それも中学校だけ。それ以降になると硬くなっちゃって間に合わない。人間二〇年あればなんとかなるけど、高校に行った後だと間に合わなくなるから。

でしょうね。

岡野 優等生だから。俺たちみたいなはみ出した人間は、羊の仲間に入つてないわけだよ。群れから飛び出ればライオンだっている、食われるかもしれないから身を守る努力だつてしなきゃいけない。

はみ出した人間はいつの時代にも、どんな会社にもいると思うよ。飛び出せばいいんだけど、そこから出らんない。怖いから、みんなと一緒に走っているわけ。だからろくなものができなくなるんだ。

修学旅行生に岡野流の教育を实践

——大体うちに希望してくるような子はちよつと変わってるんだ。不登校の子も入ってる。だけど感性はいいよ。うちの仕事を見せて話を聞かせると、目が生き生きとしてくるよ。それで、みんな学校が嫌いだな。俺の本には最初に「学校が嫌いだ」と書いてあるから、そこに共感するらしいんだ(笑)。

だけど、俺はちゃんと言うんだ

よ。おまえらは豊かな時代に育つてるんだから高校ぐらい出たほうがいい。国語や数学は適当でいいけど、英語はちゃんとやれ。これから外国人がたくさん日本に入ってくるんだから、会話ができなきゃダメだつてね。俺の話の聞くと帰つてから意欲が出て、高校にも進もうと言いつつうらしくて、親から感謝の手紙やファクスがどっさり来るんだよ。

——岡野工業さんがここまで成長した陰には、おそらく奥さんの貢献も大きかったのでは？

岡野 女房はもともとここからすぐの所で生まれ育つた人間でね。え、見合いかつて？ とんでもない、恋愛結婚だよ。俺は学歴はないけど、あつちは優等生で跡見学園短期大出身だ。だもんだから、近所のやつらときたらみんな「岡野工業がここまで成功したのは奥さんのおかげだ」なんて言いやがる。まったく、おもしろくもねえ(笑)。

——元氣の出るお話をたくさん、ありがとうございました。

聞き手／日本銀行情報サービス局長

湯本崇雄